



バブル世代のキャリアチェンジ夢囃

平林 聡^{1,2,3)} satoshi.hirabayashi@davey.com

- 1) The Davey Tree Expert Company
- 2) United States Forest Service
- 3) 千葉大学園芸学部



1. はじめに

編集委員長から頂いた執筆依頼は「新・会員の自慢というタイトルですが、会員紹介のページ、という解釈で、そして気楽な（ゆるい）イメージで執筆して下さい」ということでした。ですので、論文等では有り得ないゆるゆるの口語調で書かせてもらいます。諸説ある内容や個人の意見を多分に含みますが、エビデンスの提示等は行っておりません。また、タイトルや本文中にパクリと思しき表現があるかも知れませんが、インスパイアおよびオマージュということでお許し下さい。

書こうとしていることは、凡庸な人間が人生の様々な局面で多くの人に助けられ、ラッキーも重なり、うまく滑りこんだ、絶望しても隣には希望があった、食っていくために必死にあがいた、そしてその先に新しいキャリアが開けた、という話です。これまでの半生を振り返りながら、その時々々の心の内や本音をさらけ出すことで、日本緑化工学会の若い（若くなくても）会員の方たった一人でも良いので、自分のキャリアに疑問を持っているとか、将来、何をやりたいのか分からない、やりたいことはあるけど、そこへの一歩を踏み出せない、というような方の背中を押すための一助とでもなれば良いなあ、と思って書きます。

2. 滑り込みの人生

武蔵工業大学（現東京都市大学）の電子通信工学科を卒業し、米系の半導体・通信機メーカーであるモトローラ社に入社したのは1992年のことでした。翌年からは職場に全く後輩が入社してこなくなり、目の前で日本のバブル経済は崩壊しました。ギリでバブル期に滑り込んだところから私の社会人生活は始まりました。後になって就職氷河期の方々からは、やれ「バブルだから」だの「バブルのくせに」だのと揶揄されることも多々ありましたが、とにかく滑り込みました。

日本での11年間の社会人生活の後、2003年に脱サラして State University of New York College of Environmental Science and Forestry (SUNY-ESF)の大学院に滑り込みました。運よく棒だか箸だかに引っかかった、という感じもあります。アメリカの大学院10校に願書を送り2勝7敗と大きく負け越しました。残りの1校はYale大学環境スクールのウェイティングリストに残っ

たことで1分けとでも言いたいところですが、相撲で言えば行司の軍配に物言いがついてビデオ判定の末、軍配通り負け、といったところで10日目に負け越しでした。でも1勝だけでも大学院に入学はできたので、番付を落とすことにもならなかった、とも言えます。

後でも述べますが在学中にキャンパス内にある US Forest Service (FS) にリサーチアシスタント (RA) として雇用されたのも、降って湧いた様な話で、滑り込んだというか、転がり込んだ、といったところでした。

2017年にアメリカでの永住権（グリーンカード）を取得したのですが、申請はその前年の2016年に済ませていました。その年に大統領選があり「アメリカをもう一度グレートに」というあの方が大統領に選出されました。翌年からは外国籍の人間への風当たりが強くなったのは、今2025年と同じ状況です。うまく滑り込みました。

3. 絶望の隣は希望か

私が社会人生活の中で最大級に絶望したのは転職の失敗でした。モトローラの次には先に転職していた先輩の紹介でソニー株式会社に転職しました。問題はその後で、ITコンサルタントという肩書と高給に目がくらんで、アクセンチュア株式会社なる米系のITコンサル企業に転職したのです。それまでは無線機、ICカード、携帯電話等の組み込みソフトウェアのコードをひたすら書く仕事でしたが、アクセンチュアで求められたのは全く異なるスキルセットでした。「ロジカルシンキング」やら「クリティカルシンキング」なる手法を用いて、ひたすら思考し、その思考をパワーポイントで「絵」にする。お客さんの接待飲み会等を除けばこれが仕事の全てでした。描かれたパワーポイントは「紙」と呼ばれ、やれ「紙でできたか？」とか「紙直し入れたか？」などという言葉が飛び交い、「絵にできない思考は、思考ではない」という正しい様な正しくない様な言葉を浴びせられ続けました。労働基準法を無視した労働時間と「お前の時給は銀座の飲食業の女性より高いんだから、それに見合った仕事をしろ」というプレッシャーの中での紙描きを強いられる毎日でした。当時は「ブラック企業」や「パワハラ」という言葉はありませんでした。

携帯電話の研究・開発のバックグラウンドを買われてITコンサル企業にマネージャーとして華々しく転職したつもりが、全くの畑違い、業界用語違いでした。仕事が終

わって夜中に会社ご用達のタクシーで小一時間の帰途につくわけですが、運転手さんが用意してくれているビール1缶と柿ピー2袋だけが隣にある希望でした。

それでもなんとか食らいつくしかなく、疲弊した週末や通勤中にもコンサル系のノウハウ本や企業戦略本を読み続け、必死に勉強しました。全然面白くなかったです。分かり易く人生の挫折、絶望でした。人は追い込まれると開き直るしかないのか、「この歳になってどの道、睡眠時間も精神も削って必死に勉強し直さなきゃならないんだったら、本当にやりたいことをやってやれ」と思うようになり絶望の隣に淡い希望が湧き出てきました。

SUNY-ESF からの合格通知には Teaching Assistant (TA) の採用通知も同封され、授業料は全額免除、さらに少ないながらも給与を得られる、という条件でした。希望が湧きました。しかし、絶望の隣に希望があるということは、希望から見たら隣に絶望があるということです。渡米を控える私に1通のEメールが届きました。私を留学生として受け入れてくれるはずの教授が大学キャンパス内の駐車場で倒れ帰らぬ人となった、というのです。留学は白紙撤回になるのでしょうか、絶望です。しかし、隣のオフィスの Dr. Chuck Kroll が「うろたえるな、俺が面倒みてやる」とEメールをくれました。またも希望が隣にありました。

4. 再チャレンジ不可能な社会

日本の学生時代に、あるニュース番組でゴミ問題を取り上げているのを見て「そこは何かしなきゃだよな」とぼんやりと考えていました。ITC技術によりエンターテインメントや文化の発展に貢献することも、生活を便利にする新たな技術やサービスを提供することも、社会にとって価値のあることなのですが、私はそこでの仕事は、大量消費社会に寄与する側面があると感じていました。俺はゴミを増やしている側にいる、と。キャリアをリセットするならもっと直接的に社会貢献したり、地球環境を守ったりする、そんな仕事に就きたい、と強く思うようになりました。

仕事を辞め退路を断ち、IT系から環境系のエンジニアへとキャリアチェンジしようと、私は人生の崖っぷちに立ちました。2002年のことです。当時の日本には異なる分野にスムーズに転身できる仕組みは恐らくありませんでした。「再チャレンジ不可能な社会」です。そこで元々海外志向が強く、日本を飛び出したい願望も強かったので、「アメリカに留学してキャリアチェンジしてやれ」と思うようになりました。今は「再チャレンジ可能な社会」「人への投資やリスクテイク」といった言葉が政治の世界で聞かれる様になり、日本の社会も変わったのでしょうか。

キャリアチェンジするにあたってまずやったのは、皮肉にも「絵」を描くことでした。自分の社会人としてのバックグラウンドを整理し、どんな授業を受ければそれを活かせるのか、これからのキャリアに繋げるにはどんなスキルを身に着けるべきか、そして将来的にどんな職種や就職先を目指せるのか、そうしたことを思考して絵にしました。IT系のバックグラウンドしかなかったのが、環境系エン

ジニア転身にはGISやリモートセンシング等のIT技術に近い分野に頼るしかありませんでした。そして、この紙を携えてアメリカ横断のキャンパスビジットツアーに出かけたのです。アドミッションオフィスや教授陣、さらには若い日本人留学生にまでとにかくプレゼンしまくりました。ITコンサルから無職へと転落する中で、どこかの棒か誰かの箸にでも引っかかってくれ、と。

当時、経済的に救ってもらったのは厚生労働省からの教育訓練給付金なる制度でした。これを受給して日本の予備校に通い、大学院留学の準備をしました。出願の結果は前出の通りでしたが、これで人生踏みとどまった、と2校からの合格通知をわなわなと震えながら読み返しました。

5. これで食っていくしかない

30代も半ばに差し掛かろうという歳で、脱サラして学生になったわけですから、悠長に学生生活を謳歌することなどできません。ここでコケたら人生また落ちこみます。授業は毎回、最前列の真ん中の席に陣取りました。今思えば、先生や他の学生から「こいつガツガツしてんなあ」と引かれていたかも知れませんが、そういう体裁とかを気にしなくて良いのが自由の国アメリカです(アメリカはグレートでした)。外資系企業で働き、海外長期出張等も経験して英語力は一応何とかかなるかと思って留学しましたが、いかんせん、年齢的に暗記はまるでダメでした。

こんな大チョンボも犯しました。TAで最初に担当したのはPower Systemsというクラスで、全く何のことか分かっていませんでした。最初のオフィスアワーで学部生ほぼ全員がTAに宿題について色々質問したいと集まって来ました。全く勉強したことない内容を教えられるはずもなく、答えを全部黒板に書き出して、皆それをノートに書き写しました。自由の国のなせる業です。このことは先生にも正直に話して、それ以降はTAとしての責任を果たすべく必死に勉強しました。最初は興味が無くとも、自分が目指す将来に繋がると思えるだけで、アクセンチュア時代とは全く異なる心持でした。

自分の履修科目が3つほど、TAが1つというのが典型的な1セメスターの授業数でした。これは仕事で例えれば4か月が納期のプロジェクトを一度に3、4個抱えている、というようなものでした。これは忙しいことは忙しいのですが、例えばコンピュータラボでのワークは、予めある程度用意された答えや結果にたどり付ける様にデザインされているので、実社会での問題解決に比べたらとても楽ちんでした。学生生活を送る中で、社会人の時代と比べて、自分の時間をほぼ全て自分の為だけに使える、というのはなんて贅沢なのでしょう、と感動したものです。感動といえば自然環境に恵まれた土地でしたので、バーディングクラブに属して学部生達に教えてもらいながら野鳥観察をすることで感動も得ることができました(写真-1)。人間どんなに追い込まれても休息は絶対に必要です。

アメリカの大学院には授業の履修が全て終わった時点で、Ph.D.の研究を本格的に始める資格を得るためのCandidacy Examなるものがあります。大学によってその

形態は様々でしょうが、私の場合は Ph.D. のコミッティーメンバー4 人から出される筆記試験を 4 日間ぶっ続けて受け、それをパスした後に全員を集めての面接試験というものでした。この試験は 1 回の失敗は許され、2 回目のチャンスがあります。2 回目もパスできないと、Master の学位を授けられ大学からは退学させられてしまいます。Ph.D. 候補生になっても、その後 3 年間でその資格は失効するので、その間に学位を取得する必要があります。

Ph.D. 候補生になって、あとは Dissertation (博士論文) の研究、執筆を残すのみで大学院を去る、俗に ABD (All but Dissertation) と呼ばれる人達があります。アメリカ人はこれができます。学位が無くとも就職できれば人生としては問題ありません。ところが留学生はそうはいきません。学位を取らなければ滞在資格も得られないし、違法就労しかできません。その意味でも必死に取り組むしかありませんでした。それでも Candidacy Exam は 1 回目の面接でうまく返答できずにコケかけました。「Satoshi はまだ準備できていないのだろう」と、えらく難しい質問をしてきた Dr. Ted Endreny が温情をかけてくれて、面接は次のセメスターまで延期になりました。Ted は今では i-Tree 開発の良き同僚です。このころからは 20 年近い時間が経過しているにも関わらず、未だに、これから Dissertation を書かねばならず途方に暮れているという悪夢を定期的に見ます。

6. Dave Nowak, Urban Forestry との出会い

アカデミックアドバイザーの Chuck のグラントが終了し、私を RA として雇えなくなったと言われた 2007 年の夏休み前、大学院の同期生である Greg Bacon 君からキャンパス内の FS で RA として働かないか、と誘われました。彼は既に FS で何年かの勤務経験があり、私が元々はソフトウェアエンジニアだったという話を彼のボスである Dr. Dave Nowak にして、じゃあ連れてこい、ってことになっていたようです。

言われるがままに Greg と一緒に Dave に会いに行きました。採用面接です。履歴書も何も要求されず、「Hi, お前、ソフトウェア書けるのか?」「Hi, I'm Satoshi. Ah, yes」という程度の言葉を交わしたくらいで、数秒で終わった感じがします。採用決定です。その年の夏休みから RA として勤務し始め、現在に至っています。

Dave の最初の印象はマシンガンの様に話す人、でした。慣れるまでは話を聞き取るのに苦労しましたが、これが学位取得後のキャリアや人生にとっての最大の出会いでした。後で知ったことですが、この Dave はなかなかの人物でした。i-Tree とその前身である UFORE モデルを開発して世の中に広めた張本人で、アメリカはもとより世界の Urban Forestry の権威といったところかと思えます。

また、これは更に後になって知ったことですが、Urban Forestry の黎明期にこの新しいコンセプトについてアカデミアや実務者の間での共通認識を醸成するための The National Urban Forestry Conference を主導したのが SUNY-ESF とこの FS のオフィスだったのです¹⁴⁾。私が

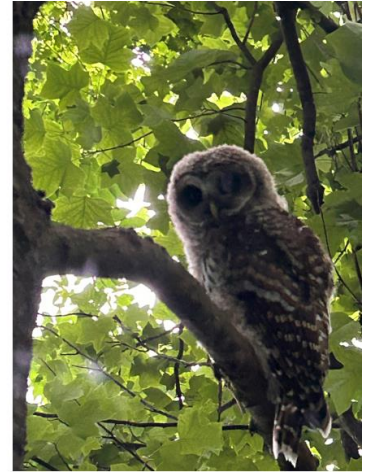


写真-1 2024 年近所の公園で遭遇した Barred Owl

個人用に使っているオフィスの本棚にタイプライターで打ち込まれた、その会議録の冊子を見つけた時はお宝発見という気分でした。これを編集したのが、私の Ph.D. 学生時代のコミッティーメンバーの一人、Dr. Lee Herrington だったことには更に驚きました。その時には退官されていて、現在は他界されているので Urban Forestry 黎明期の生の証言を聞くチャンスを逃したのが残念です。

7. 現在の生活

2005 年、2009 年にそれぞれ Master of Science, Ph.D. を取得し、学生生活は終わりました。そこからが本当にこの業界で食っていくための闘いです。とは言え、運よく FS に潜り込んでいた私は i-Tree 共同開発企業である The Davey Tree Expert Company と FS のジョイントポジションという形でずんわり雇われました。2012 年には日本工営 (株) の森岡千恵さんから問い合わせのメールを i-Tree のカスタマーサポートの部署に頂きました。日本からの問い合わせということで私が対応させて頂き、そこから日本の皆様との関係が始まりました。学位を取得したとは言え、その分野を英語でしか勉強していないので日本語の専門用語が理解できず、「こいつ大丈夫か?」と、皆さんには大変いぶかしがられたことと思います。

2016 年の学会誌大会特集号に i-Tree Eco による定量化を日本で初めて行った論文を発表し、京都での大会に参加しました。それ以降、日本の研究者、実務者とのコラボレーションで技術報告の発表や研究集会等に参加させてもらっています^{3-13,15)}。コラボレーションはアジア各国へと拡がり、Asian Urban Forest Network (AUFN)での活動に繋がりました²⁾。さらには、千葉大学の加藤顕先生のご尽力により客員准教授なる称号も頂きました。一介のサラリーマンだった頃から考えると夢のような話です。

私はアメリカのニューヨーク州に 2003 年から居住しています。日本の皆さんはニューヨークといえばそれは高層ビルが立ち並ぶニューヨーク・シティ (NYC) を想像されるかも知れませんが、私が住んでいるのは NYC から車で 5 時間程内陸に入ったシラキュースという地方都市です (写真-2)。日本の皆さんからは時々 NYC の最新グリ



写真-2 LEED プラチナ認証取得の
SUNY-ESF ゲートウェイセンター



写真-3 豊かな街路樹と Tree City
USA 認証取得の看板



写真-4 シラキュース市内のレイン
ガーデン

ーンインフラ事情について視察したいから案内して欲しい旨の依頼を頂きます。その都度、NYC の職員として緑化に携わっておられる島田智里さんをご紹介してきましたが、彼女の負担を減らすためにも、ニューヨーク州の地方都市にも視察においで下さい。Tree City USA の認証りを 21 年間取得していたり（写真-3）、市内にはレインガーデン等のグリーンインフラも多く設置されています（写真-4）。2026 年には i-Tree のリリース 20 周年を記念してシラキュースでのカンファレンスを開催する計画も持ち上がっています。

組み込みソフトウェアエンジニアから環境エンジニアへ転身し、今は日本の方々と日本のアーバンフォレスト、緑化、グリーンインフラ等について、同じ夢や目標を語らい、それらを実現すべく活動させてもらうことができているという夢漸でした。

参考資料

- 1) Arbor Day Foundation. “Tree City USA” www.arborday.org/our-work/tree-city-usa (Accessed 13-Jun. 2025).
- 2) Asia Pacific Association of Forestry Research Institutions (APAFRI). “1st Workshop of Asian Urban Forests Network (AUFN) for People & Environment” www.apafri.org/activities/2023/aufn_1stworkshop/aufnworkshop.htm (Accessed 13-June 2025).
- 3) 平林 聡(2019) 特集「都市緑化の価値を考える」緑の価値の客観的評価と波及効果—欧米諸国における i-Tree の実例を踏まえて—。日本緑化工学会誌, 44(3): 460-464.
- 4) 平林 聡 (2022) 特集「技術を学べるセミナー：グリーンインフラの評価と活用方法」～グリーンインフラを身近に感じる手法紹介～アメリカ合衆国から発信される樹木評価システム i-Tree Eco の活用方法。日本緑化工学会誌, 48(4): 581-584.
- 5) 平林 聡 (2023) 日本全国での樹木による炭素固定量算出手法の開発。日本緑化工学会誌, 49(1): 149-152.
- 6) 平林 聡・阿部 勉・今村史子・森岡千恵 (2017) 暑熱環境に対する街路樹の影響を推定する分布型 GIS モデルの開発。日本緑化工学会誌, 43(1): 243-246.
- 7) 平林 聡・今村史子・常松展充・徳江義宏・阿部 勉・市橋新・森岡千恵 (2018) 東京オリンピックマラソンコースにおける観客の熱的快適度の推定。日本緑化工学会誌, 44(1): 186-189.
- 8) 平林 聡・加藤 顕 (2024) 特集「i-Tree による生態系サービス評価・実務での活用事例と日本発の新機能実装への展望」特集にあたって。日本緑化工学会誌, 49(4): 343.
- 9) 平林 聡・中谷美紗子・和田清栄 (2021) アーバンフォレストによる生態系サービス評価のための Web マップシステムの開発。日本緑化工学会誌, 47(1): 149-152.
- 10) 平林 聡・Xiaoyang Tan・江口則和・鷺見泰弘・矢野佑樹・加藤 顕 (2022) 特集「i-Tree による生態系サービス評価—事例紹介と今後の課題」i-Tree による生態系サービス評価—事例紹介と今後の課題。日本緑化工学会誌, 48(3): 476-479.
- 11) 平林 聡・譚 瀟洋・柴田昌三 (2019) i-Tree Eco の医療費・冷暖房費削減モデルの日本向けカスタマイズ。日本緑化工学会誌, 45(1): 200-203.
- 12) 平林 聡・徳江義宏・伊藤 綾・Alexis Ellis・Robert Hoehn・今村史子・森岡千恵 (2016) 川崎市川崎区を事例とした i-Tree Eco による街路樹の生態系サービスおよびその貨幣価値の推定。日本緑化工学会誌, 42(1): 44-49.
- 13) 家根橋圭佑・平林 聡・森岡千恵・屋井裕幸・益田宗則・宇野誠一郎 (2024) i-Tree Cool Air による雨庭構成要素に応じた暑熱低減効果の定量評価。日本緑化工学会誌, 50(1): 67-70.
- 14) Johnston, M. (1996) A brief history of urban forestry in the United States, *Arboricultural Journal*, 20(3): 257-278.
- 15) 中谷美紗子・平林 聡・難波結希 (2020) i-Tree Eco との互換性・拡張性を実現する樹木構造解析システム。日本緑化工学会誌, 46(1): 71-74.